

### 3 研究教育環境をリセットする —大学教員生活における二つのブレイク・スルー—

堀江 薫(ほりえ かおる)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 教授

南カリフォルニア大学(USC)大学院人文科学研究科修了, Ph.D.(Linguistics). 秋田聖霊女子短期大学英語科専任講師, 東北大学留学生センター助教授, 同留学生センター教授, 同高等教育開発推進センター教授を経て現職. 専門分野は言語類型論, 認知・機能言語学.

#### 1. はじめに

私は上智大学で1982年に学士号, 1984年に修士号を取得し, 1985年から1988年まで秋田の短期大学に勤めました。その後, 米国で博士号(Ph.D)を1993年に取得し, 1994年4月に東北大学に奉職, 2010年3月まで16年間に渡って大学院(協力講座)において言語学の講義, 言語学・応用言語学分野で修士論文・博士論文の研究教育指導に従事しました。現在は名古屋大学に移り, 大学院(基幹講座)において言語学の講義, 言語学・応用言語学分野で修士・博士課程学生の研究指導を行っています。

通算20数年に及ぶ大学教員生活の中で私は1988年と2010年の2回, 勤務していた大学を辞職しました。この2回の体験は私にとってそれまでの研究教育環境を大きくリセットし, 一歩前に進む契機を得る「ブレイク・スルー(突破口)」というべき貴重な経験でした。以下では, これら2回の経験がそれ以後の研究教育生活にどのような影響を及ぼしたかをお話したいと思います。

2015年

Vol. 6

## 大学教員のブレイク・スルー Faculty Breakthroughs in Higher Education

## 2. 短大を辞めて米国大学院に留学をする

私が国内の大学の修士課程を修了した1984年当時は、言語学を含む人文科学分野では大学院において、(課程)博士号を取ることはまだ一般的ではありませんでした。私自身も修士課程を終え、一年後の1985年に大学院の主任教授からの紹介で地方の短大に専任講師として就職しました。

大学院修士課程を終えたばかりの右も左も分からない若輩者でしたが、勤務先の同僚や学生とともに過ごす短大の学園生活に徐々に馴染んでいきました。同時に、出身大学・大学院と全く異なる地方短大という環境でどのように自分のモチベーションを高め、研究を展開していくのかを真剣に考えるようになりました。社会人になってから、研究に費やすことのできる時間は減りましたが、自分の本当にしたい研究の方向性はむしろ明確になっていきました。研究のための環境整備として、同僚や近くの大学の先生方とともに言語学の読書会を企画したり、出身校の大学院に出向いて文献を渉猟したり、夏期の言語学講習会に出るなどして知的な餓(かつ)えを癒そうとしましたが、言語類型論という学問分野を米国の大学院で専門的に研究したい、という気持ちが止み難く強くなりました。その結果、1988年7月末に短大を退職して8月より米国南カリフォルニア大学(USC)大学院に留学することになりました。

その後1994年3月までの6年間に及ぶ米国での留学生生活は、私の研究者としてのキャリアの上で大きなブレイク・スルーとなりました。当時のUSCは言語類型論という分野の世界的な研究者が複数おり、幸運にも直接博士論文や研究全般の指導を受けることができました。何よりも大きな収穫だったのは、本当に自分が取り組みたい研究分野・テーマを見つけ、思う存分取り組み、学会発表や論文発表を通じて自分の研究成果を公にする喜びを経験することができ

たことです。この経験を通じて、私は30代半ば近くにしてようやく言語学研究者としての自信を持ち、Ph.D.(博士号取得者)の仲間入りをすることができました。

短大を辞めた時点では留学先の大学院で果たしてどこまでできるのか、修了できてその後どうなるのか、といった先が見えない不安で一杯でしたが、いま振り返ってみると「You got to do what you got to do(人は何であれ自分がすべきだと思うことをしなければならぬ)」という心情につき動かされて行動し、研究者としてのキャリアを大きく一歩前に進めることができた貴重な経験でした。

## 3. 知命にして他大学に移る

冒頭に書きましたが、私は2010年3月で、16年間務めた東北大学を退職し、4月より名古屋大学に移りました。これは、2節でお話した多分に若さゆえの思い切った決断に比べ、数年ごしの熟慮の末の選択でした。

東北大学では赴任当初から研究教育環境に恵まれ、大学院(協力講座)で言語学を講じるとともに、多くの優秀な大学院生(日本人・外国人)の修士論文・博士論文の研究指導に携わることができ、国内外の学会発表・論文出版・編著書出版等の多くの機会に恵まれました。博士課程を修了した多くの元指導学生は国内外の大学において専任・準専任のポストを得ています。2002年から2007年にかけては、競争的資金重点配分型研究教育プログラムの先駆であった「21世紀COEプログラム」に人文科学分野で採択された「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」の拠点リーダーとして、直接間接に多くの若手言語学研究者の研究教育環境の向上・キャリア支援に関わることができました。2節で述べたブレイク・スルーが、東北大学での豊かな研究教育環境創成への道を拓いてくれたと言えます。

その反面、大学院に協力講座教員として関わっていくことの限界も感じるようになりました。21世紀 COE プログラムは時限付きのプログラムで、期間終了後は大学の方で研究教育拠点の継続的な組織化を行うことが期待されていましたが、残念ながら満足はいく形では実現しませんでした。祭りの終わった後の空虚さを研究・教育で埋めようと努力しましたが、大学の環境を内部から変えることの難しさも痛感し、果たしてこのままの環境で自足して過ごしていくかを自問自答するようになりました。

そのようなおり、一件の公募情報が目に留まりました。名古屋大学の大学院(基幹講座)の教授職の公募でした。教授職の公募は一般的にそれほど多くなく、研究教育環境の点で互換性のある大学のポストとなると、非常に限られてきます。大学の規模や競争的資金の獲得実績などの点では東北大学は名古屋大学に上回っていますが、中部(ミッドランド)という東日本と西日本の中間的な地点に位置し、交通アクセスが抜群で、学会のおりにキャンパスを訪ねてかねて好印象を持っていた名古屋大学の公募情報に接し、大いに迷いました。当時指導教員として担当している院生が修士・博士課程に多く在籍していましたので、万一名古屋大に決まった場合のことを考えると責任の重さを感じました。同時に、応募しないと後悔するだろうという思いもあり、熟慮の末応募しました。

最終候補に決まったという連絡がしばらくしてあり、面接を経て正式に採用が決まりました。今回は、留学のために短大を辞めた20年代のときとは置かれた立場が大きく異なり、16年間で培ってきた研究教育環境、何よりも学位取得の半ばである院生の方々を残して去ることになるため複雑な思いがありました。残る院生の方々には個々に相談の上、同僚の先生方への研究指導の委託や後期課程受験の道筋をつけるべく最善の努力をしました。2010年3月末に思い出深い仙

台を離れ、名古屋大学に赴任しました。

ここから先は現在進行形の話となりますが、赴任先の名古屋大学の大学院(基幹講座)では言語学の講義を担当し、指導学生ゼロからのスタートとなりました。その後、幸いなことに私の元に研究指導を求めてくる学生が毎年継続しており、現在は主指導教員として博士課程学生10名、修士課程学生5名の研究指導を担当し、非常に充実した言語学・応用言語学の研究室体制を作ることができています。これは、東北大学での16年間に渡る大学院での研究教育経験に負うところが大きいと感じています。東北大学に残して来た院生の方々は元同僚の先生方にお世話になり、私も研究指導・助言を継続してきました。その後2名の方が修士号、5名の方が博士号を取得しましたが、殆どの論文審査に他大学教員として加わりました。

名古屋大に移ってから、研究面では以前にも増して国内外の論文出版・編著書出版の機会に恵まれ、国内外の学会の基調・招待講演者、公開集中講座の講師、競争的資金の審査委員、学会役員等の多くの役割・任務を従事されるようになりました。その中で、2014年4月より日本学術振興会学術システム研究センターにおいて人文学専門調査班の専門研究員に言語学分野を代表して選ばれました。2017年3月までの3年間、科学研究費や特別研究員の審査委員の推薦や科研費の審査プロセスの検証等の重責を担うこととなります。また、2014年9月からは国立国語研究所言語対照系客員教授に着任しました。現在の名古屋大での研究教育環境は、東北大時代のそれとはもちろん大きく異なっていますが、清新な気持ちで意欲を持って研究教育に取り組んでいます。東北大から名大へという選択は私にとって研究教育環境をリセットする第二のブレーク・スルーであったと言えます。

#### 4. おわりに

以上、非常に個人的な経験に基づいて私の大学教員生活における二つのブレイク・スルーというべき研究教育環境のリセットにまつわる個人的な経験をお話しさせていただきました。これらのブレイク・スルーは、それぞれに不安と痛みを伴うものでしたが、その後の研究教育生活に豊かな実りをもたらしてくれました。若い時だけでなく、壮年・熟年になってからも意志と機会があれば環境をリセットできる可能性があるのは大学教員の素晴らしい特権だと思います。